故国を後にして(2)

良き歌のために

モーレンカンプふゆこ

私はユーモアが好きである。人生の悲しみをエンエンと嘆くような短歌は、大嫌いである。たまにオランダくだりまで送られてくる雑誌の、九九%に私はまず　オエッを圧え、怒りを圧え、湧れくる哀れさにみじめになる。そしてそれらとちょんちょんの、否下手するとそれよりももっと下手くそな己の短歌を読み返して、救いようもなく落ち込んでゆくのである。

ペン取るを恐るる日には一魂の石をも蹴らず空も仰がず

俳句となると話は別である。とにかくあのポンポン冴えた生粋の「詩」は読んでいて楽しいし、作るとどんどん出来る（ここがどうも落とし穴らしい）俳句のあのユーモアに籠められた悲哀、客観性の中のかそけき自我、相乗作用を起こす言葉と言葉、とりつかれる気持ちがよく分かる。「季語」という勉強もしなければならないから、知識も豊かになり、心も広くなる、はずである。

ためしに同じテーマで短歌と俳句を作ったとしよう。「手の中にどんぐりといふ故国あり」といえばスカーッとするのに、「遙かなる故国と呼びきどんぐりを拾えば故国手の中に在り」とすると、もたもたとしてくどく、いらいらしてしまう。

しかしである。調子に乗ると、こういうことにもなる。つまり、「茄子買いにトルコの店の奥深く」などといってみても、オランダに出稼ぎに来たトルコ人達が、失業難にも福祉国家であるために帰国する必要がなく、妻をよびよせ、子をたくさん作り（時には扶養手当を目当てに）街の一角にゲットーのような地区をつくり、店もでき、コーランの音楽がながれるゴタゴタした雑貨店

の奥の方に、日本の茄子のような小つぶの茄子が売っていて、（スーパーにはおばけのような大きいのしかないから）それを買いにいく度に、彼らは望郷をどう耐えているのだろうかと思う、なんてことは、この一句の背景として日本人には分かってもらえないだろう。つまり俳句は短かすぎるのである。短かすぎるということはもう救いようがなく、作者の人生やもち味がなかなか盛りこめない。せっかく外国に骨を埋める人生を選んだのだから、少しはその辺の事情を分かってもらいたいのである。「蛇を打つ父の執念我が執念」ではどうも平凡である。「蛇を打つ父の執念我が執念祖国の藪は暗かりしかな」と七七をつけて、やっと私の歌になる。

それならば自由に自由詩をという手もあるが、こっちの方は「生命力がありすぎて（つまりすぐ調子に乗って）、定型で圧えないと浮上」ということらしく、詮方ない。

だいたい私が短歌を始めたきっかけは、朝日新聞しか手に入らなかったことと、俳句はむずかしいが、短歌なら私も書けるという妙な自信で始めたのだから、本当は自由詩が書きたいのに短歌しか書けない、という　石川啄木のような劣等感があった。それなのに私を知る人はことごとく「『短歌』を書きなさ

い」という。

短歌に対する嫌悪感は、己に対する嫌悪感と関わりがあるのだろう。私が今何としても短歌を書き続けようと思うのは、いつの日にか良い一首を作ってみたいと思っているからである。その一首が己を救ってくれるかもしれないと、秘かに信じているからである。俳句ではそうはいかない。

「我」の字を又も削らむ
唯一つ携えて来し「我」
良き歌のために

（歌人・アムステルダム補修校）